

東アジアジュニアワークショップ 2013 感想

新熊寿基 京都大学

1. フィールドワークに関して

今回ホスト国ということもあり、どのようなフィールドワークを用意すればよいのか、正直わからないことが多かったように思う。ホスト国としてのプライドというか、せっかく来ていただくのだから一つでも多くのことを学んでもらいたかったし、経験してもらいたかったし、ただ一方で日本社会に触れることが出来るような、そのような内容のプラントはどのようなものか。この問題は私たちを大きく悩ませた。またひとたびプランを策定しても、本当にこのプランが台湾の、ソウルの皆に満足してもらえるのか不安だった。

結論から言うと、この不安は杞憂に過ぎなかったのだが、興味深かったのは彼らが皆、私たちの想像以上に興味を持ってフィールドワークに参加していたことだ。介護施設の現状や、同和地区、在日朝鮮人地区に対する彼らの姿勢は想像以上に真摯なもので、学ぶということに国境はないというか、自分の知らない世界に触れることへの大切さを彼らから教えてもらえた気がする。

日本人でもあまりよくわかっていないかもしれない日本について、彼らに触れてもらえることが出来て本当に良かったと思う。同時にまた私達も勉強になった。

2. ワークショップに関して

ワークショップに関して、私は大変な苦勞をした。とはいっても先生の力なくしてはここまでの発表はできなかったと思う。まずは協力していただいた方にありがとうございましたと言いたい。発表するにあたって、私が強く思っていたのは、「やると決めたからには最後までやり切りたい。しっかりとした形に残したい。」というものだった。私は英語が特別得意でもないし、また社会学を学び始めて半年足らずの若輩者で、かつ卒業論文のテーマも当然決まっていないうし、そもそも社会学のいろはすら詳しくは知らないそんな学部生である。だが、そんな学部生だからといって中途半端な発表をして許されるわけではない。そのため、「社会学とは何か?」「どのようなテーマを取り上げれば興味を持ってもらえるのか?」など、考えるに考え、大いに悩んだ。テーマが決まっても、うまく発表ができるのか、質疑応答はうまくやることのできるのかという不安は発表が終わるまでなくなることがなかったが、「やると決めたからには最後までやり切りたい。しっかりとした形に残したい。」という思いが私を動かした。せつせと調べたり、いい発表にできるように何度も修正したり、研究室に泊まったり、ワークショップに向けて一つの発表を作り上げるというこの夏の体験は私にとって貴重なものになったし、将来に向けての何か自信になるようなそんな経験だったと思う。

他大の発表を見て感じたことは、まず皆英語を流暢に操っているということだ。英語の必要性というか、もっと英語を勉強してすらすらと話せるようになりたい、日本のことを英語で世界に発信したい、思っているものをしっかりと伝えることが出来るだけの英語力が欲しい、そのためにはもっと勉強しないとひしひしと感じた。

またワークショップを通じて台湾大、ソウル大の学生がどのような分野に興味を持っているのか、またそれぞれの社会はどのようなものなのか、どういった問題を抱えているのか、普段日本には触れるこ

とのできない内容のものもあったので、新たな世界を見た気がする。

3. 受け入れなど準備に関して

まず表したいのは、先生およびユニットの皆様に対しての感謝の気持ちだ。私たちは自分たちの発表やフィールドワークに関しては入念に準備をして当日を迎えたが、先生およびユニットの皆さんはホテルの手配や当日の資料や機材の準備などを全面的にサポートしてくださった。本来私たちがもう少し積極的に力になるべきではなかったかと思う。ホスト国として中途半端なフィールドワーク、ワークショップにするわけにはいかないため、緊張感のある受け入れ準備であったが無事開催することが出来て良かったと思う。